JNDC ニュース, No.10 (1969)

“無　題”

大　野　善　久　（日本原子力研究所）

ＪＮＤＣニュースは本刊をもつて第１０号となつた。一言で１０号といえばそれまでだが、それまでだが、それはone decade を形成し、１桁から２桁への番号の発展だと思う。しかも1966年３月、第１号が発刊されてから第４年目を迎えたのである。これはあくまでもニュースであつて、寄稿する者、編集する者、又読む者、いずれも仕事上の直接的な利益をこれから期待できる性質のものではなく、それだけに定期的な刊行にはいろんな困難が伴つたことであろう。関係者ならびに絶えず協力をおしまなかつた諸氏の努力のたまものであろうと思い、心からお礼を申上げたい。そして核データの利用者と、それの提供者と、相互間の意見、成果の交流の場の一つとして、このニュースが益々発展することを願つている。

必要性に見合つたデータセンタ設立の見通しは明るくはないようである。しかし、核データ資料室についての問題提起を原研内でおこない、故杉本朝雄理事から、私に立花、能沢両氏を加えて、データの収集と伝達についての立案を全国的視野から行うよう依頼された１９６２年の当時と較べると、それは昔日の感を禁じえない。シグマ委員会の設立、１９６３年の原子力局からの試験研究の受託などの経過をたどりながら、現在では核データについての理解と認識が、関係ある研究者の間に深まつたのは事実であり、更に広範な国際交流にまで発展している現実をみないわけにはゆくまい。云うならば、この間日本の原子力開発も、どうにか地道に進められて行くような姿勢ができ始めたものと思う。

現実は体制面で理想からほど遠く、様々な困難があり、今こそ適切な施策が必要であると思う。原子力開発の過程で、核データはそれ自体が重要なことの一つであり、欠くことのできない要素であることに疑念の余地はない。それを満足させるためには、核物理学・炉物理学上の広範な知識の全面的な理解と発展とがそれを保証する唯一の大前提ではなかろうか。